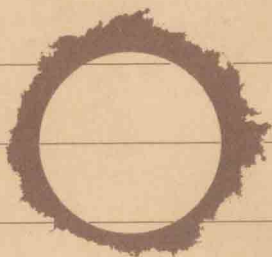


パリ燃ゆ 4

大佛次郎



朝日新聞社

大佛次郎（おさらぎ じろう）

本名、野尻清彦。1897（明治30）年横浜に生まれる。東大政治学科卒業後、外務省勤務などを経て文筆業に入る。戦前戦中戦後を通じ、時代小説、現代小説、ノンフィクション、戯曲、童話にいたる幅広い分野の名作を世に送り続けた。代表作としては『赤穂浪士』『霧笛』『帰郷』『パリ燃ゆ』などがある。ライフワークとも言うべき『天皇の世紀』を朝日新聞連載中の1973年、75年余の生涯を終えた。

パリ燃ゆ 4

昭和58年4月20日 第1刷発行

定価 400 円

著 者 大佛次郎

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京 0-1730

© MASAKO NOJIRI 1983 Printed in Japan
0193-260914-0042

パリ燃ゆ 4

大 佛 次 郎

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鑛治

目次

第四部 無名の人々上

朝戸出	9
成るか否や	47
秩序の友	73
防波堤	99
折衝	113
新しき日	140
陣痛	192
ヴェルサイユ進撃	220
マクマオン帰る	260

パ
リ
燃
ゆ
4

第四部

無名の人々

上

朝戸出

1

陰悪になった事態の收拾に当ろうとしてバリの各区の区長たちが、急遽集った。場所はブルス区の区役所である。四時頃まで彼らは内閣に行き交渉した。相手にならない状態である。ティールは、もう逃亡していたし、残っていたビカールが彼らを受付けなかった。区長たちは、国民軍総司令官オーレエル・ド・バラディヌ將軍をつかまえた。

將軍は憤る調子で答えた。

「我々に責任は一切ない。弁護士の間中がやったことだね。全部、あの手合の仕事だ。」

外の町では事が急激に進められている。国民軍総司令官の職権も、今は空しい。そうこうしているうちに夜になる。国民軍大隊の連盟兵が市庁を囲み、ヴァルラン、ベルジュレの率いるパティニョル、モンマルトル地区の大隊が、ヴァンドーム広場を占領した。区長たちの議論は分裂した。ヴァシユロ、ヴォートランなどは、叛乱が起つたのを最初から憤慨している。徹底的に弾圧させようと主張する。

ヴァンドーム広場の国民軍總司令部は兵士たちの手に渡った。オーレエル・ド・バラディヌ將軍は所在を隠していた。正規軍は、ヴェルサイユへ後退せよと命ぜられ、混乱しながらも、汐がひくように遠ざかりつつある。

弾圧など思いも寄らぬ。分別のある区長たちが他の解決法を求めた。至急、国民軍司令官と警視總監を任命し、時局に当らしめるのだ。何となれば、現職の者が行方が知れぬから。急の場合のせいもあつたろうが、それにしても彼らは人選を誤った。成長しつつある事件をまだ理解出来なかつたからである。暴動という表面の性質だけが見えた。人々は六月事件の叛徒を鎮圧して認められたエドモン・アダンを警視總監に宛て、無意味なビュザンヴァルの戦場で打撲傷を受けた故の人氣で今度の選挙で代議士に当選したラングロア大佐を国民軍の司令官に持つて来て、適材を得たと思った。大佐は、一時インターナショナルに籍を置いたこともある人物だが、日和見で、すぐ敵に回ることもする性格であつた。

七時頃、この解決策を提げて、ティラール、メリース、ヴァシエロ、トランなどがジュール・ファーヴルを訪問した。中に、ジャン・バティスト・ミリエールが加わっていた。樽職人だったのが、法学博士となり弁護士を開業し、社会主義のジャーナリストとして活動し、新聞「マルセイエーズ」の発刊に当り、投獄もせられ、現在はセーヌ県から代議士となつて、辞職せずに残つていた一人である。

ファーヴルは、ミリエールを見ると顔色を変えた。敵意を隠さなかつた。

「將軍たちが銃殺されたとは、事実ですか。」

と、ファーヴルは区長たちに詰問した。それと聞くと、きびしく氣勢を示して言明した。
「人殺しどもと、交渉は出来ませんな。一切……」

ヴァシユロ、ヴォートランたちは、政府の毅然たる態度を歓喜して迎えた。だが、これも、つかの間の悦びに終わった。伝令が来て市庁から軍が撤退したと知らせた。区長たちは一旦ルーヴル区役所に帰り、市当局からの要請で市庁に入ろうとした。その時、連盟兵のバトロールが入って来た。区長たちは、また、もとのブルス区役所に移って、そこを本部とした。

閣僚の中で市中に残ったジュール・シモン、ピカルル、ル・フロは、隠れてアバテュクシ街（現在のポエシイ街）に集っていた。ファーヴルがそこに来て、区長たちの意向を知らせた。

直ちにオーレエル將軍を罷免し、ラングロア大佐を呼びにやった。旺盛で精力的な態度を見て大臣たちは簡単に安心した。ラングロアは、司令官となることを承諾し、すぐにブルス区役所の区長たちがいるところに来て、自分が身命をささげて事件の解決に努力すると誓って、市庁に向った。

2

リサガレエの記述を辿って見よう。

「市庁の前にある広場は、真昼のように活気づいていた。市庁の窓からは人々の往来が見られた。しかし過去にあった騷擾に似たところはない。番兵が立っていて、将校か中央委員会のメンバーでないと通行を許さない。委員たちは、十一時頃から、一人、また一人と到着して、以前トロシユが閣議を司会したのと同じサロンに集った。二十人ほどに成った。彼らは非常に心配している

らしく、また、躑^{たぐひ}いを現わしていた。彼らの誰一人として、これだけ重い権限が自分たちの肩にかかつて来るとは予期しなかった。多くの者は市庁に自分たちの委員会を置くことを望んでいない。我々は政府と成る権限を委任せられていない。こう繰返す者が多かった。新しく誰か委員が入って来ると、すぐとまた、同じことが議論せられるのである。」

エドワール・モロオと言う三十二、三歳の青年が出席していた。運送屋で働いていたと伝えられる。文学志望で、これまで政治に関係したこともなくイギリスに渡って暮していたが、戦争が始ってから帰って来て、国民軍に志願し籠城戦に参加して熱心に働き、最近中央委員に選挙され、ここに出て来ていた。この白面の青年が一同の意見を整理して、発言した。現在までに占領した陣地を捨ててはならぬが、市庁に留まるのは選挙を行う為で、二、三日のことで足りるのではないか？ 後の事は、選挙に当選した者に任せて、現在の中央委員の任務は終るものと見よう。

海軍士官出身のシャルル・リュリエがそこにいて、自分が一切、引受けると発言して、人々が軽率に承認した。このリュリエを国民軍の司令官に任命するよう決定した。これが酒飲みの、ぐうたらな人間だったのは不幸なことである。

国民軍の大隊長で、この朝からさかんな働きをしたブリュネルがいて、しっかりした指揮をしていた。ブリュネルは、政府側の軍が一せいに退くと知って、追撃をかけ、バリの各所の城門を閉ざすよう人を走らせて献議して出た。リュリエは、果断にその処置に出る男ではない。

ブリュネルは、様子に依っては逃げる政府を急迫してヴェルサイユに肉薄する計画さえ抱いていた。この大胆な処置に出たら、ヴェルサイユに來たばかりの政府も、議会も、ひとたまりもな

い決定的に危険な運命であった。

ブリュネルには単に市庁の防備に当るよう命令があった。

3

リュリエが中央委員会から司令官に任命されたところに、午後十一時、これは政府や区長たちから司令官に任命されたラングロア大佐が、体軀堂々たる姿で市庁に出頭して来た。

手回しよく就任を挨拶する宣言を書いて官報に掲載するよう手続きを終え、出て来たものである。歩哨が大佐を咎めた。

「誰か？」

大佐は威厳を見せ答えた。

「国民軍総司令官。」

中央委員会に取次がれた。もちろん面会することにした。

「貴下を任命したのは誰ですか？」

「議会。」

と、答えて、

「自分の名は協調の保証です。」

代議士であり、もとインターナショナルに属した人物なのである。

若いエドワール・モロオが、これに、きっぱりと答えた。

「国民軍の司令官は、国民軍自らが任命するつもりでおります。バリーに攻撃を加えた議会に依る貴下の任命は、決して協調の保証とはなりません。」

ラングロア大佐は重ねて言った。

「自分は、誤解を終らせるのを目的に就任したものだ。」

「我々は、自分たちの指揮者を任命し、市会選挙を行い、王政主義者に対抗する保証を考える意志であります。あなた方が我々の仲間ならば、民衆の選挙に従ってください。」

大佐と、随行して来たロックロウ代議士は、合法的な権力は、国民議会のみである。委員会は蜂起から生れたもので、議会として承認出来まい、と強硬に主張して屈服させようとした。

中央委員会も硬化して、詰問を返した。

「中央委員会を承認なさるのか、なさらぬのですか？」

「承認しません。」

喧嘩別れである。

陰悪になった空気を見て取ってラングロア大佐は退場した。逃亡であった。

「夜は平穏であった。自由の為には致命的な静けさをたたえた夜である。ウィノワ將軍は南部の市門から連隊、砲兵隊、貨物をヴェルサイユに輸送させた。兵隊たちは、だらだらと歩き、憲兵に嘲笑を酬いた。司令部が理性を失くしたのは軍の伝統に従ったものだろうか。バリー市内に三個連隊と六個砲兵中隊、セーヌ河に砲艦を置き忘れた。軍艦は沈めるだけでもよかったのである。」

(リサガレエ)

ブリュネルの提議どおり、国民軍の側で僅かでも示威的行動に出たら、この退却は不可能となった場合であった。新任の総司令官リュリエは、それをしない。全部の出口を開放したままにして逃亡を手伝った結果を見た。

4

翌十九日の朝となると、パリは忽然と変貌を遂げていた。朝霧が晴れると、市庁に赤色の旗が翻ひるがえっているし、「軍隊も政府も行政部も一緒に蒸発して消え失せていた。サン・タントワヌの場末街や、暗いバフロワ街の深淵から突上げられて、中央委員会がパリの先頭に、白日の燦々さんさんと降り注ぐ地表に立っていた。」

委員会は、新人から成立していた。過去もなく政治的野望もなく、制度のことにも無造作で、共和政を救うことのみを素直に念じている人々である。偏見もない。觀念の化物も背負っていない。野心も、分派も考えられなかった。目まいするような高さに登って下しまって、うぶな彼らは、純粹にパリのことのみ考えて進退した。パリの為に市庁を確保する。本能的な理念なのである。手近いところから努力した。「民衆にとって市会とは即ちコミュニケーションであった。嘗ての母親かつであり虐げられた者への救いの担い手で、悲惨から守ってくれる保証であった。政治に素人の彼らはそこに集って、結束しようとした。」

朝の八時半に集合して中央委員会を開いた。若いエドワール・モロオが議長となった。まったく無名の男だったが、委員会の思考力となり、雄弁な言葉となっていた。